

## 前近代に学ぶ、未来の都市空間

Learning Future Urban Space from Pre-modern Society

### 北山恒

Koh Kitayama

architecture WORKSHOP主宰、法政大学教授／1950年生まれ。横浜国立大学大学院修了。横浜国立大学Y-GSA教授を経て現職。建築設計。作品に「洗足の連結住棟」「祐天寺の連結住棟」ほか。著書に『都市のエージェントはだれなのか』ほか。日本建築学会賞(作品)、日本建築家協会賞受賞ほか。

### 西村幸夫

Yukio Nishimura

東京大学大学院工学系研究科教授／1952年生まれ。東京大学都市工学科卒業、同大学院修了。工学博士。都市計画。著書に『都市保全計画』、共著に『図説 都市空間の構想力』。1996年日本建築学会賞(論文)受賞。

### 現代都市の二面性

——経済効率優先の制度設計と歴史的なまちの構造

北山 われわれが日常目に生活している現代都市は、北米のシカゴに原点があるのではないかと考えています。

19世紀末のシカゴは、ミシシッピの水運と大陸横断鉄道の結節点で、巨大資本が集まりアメリカ経済の中心となりつつある時代でした。1871年、シカゴ大火が起こり、その後まちを再生していく時、時代の要求する経済活動を効率よく行うかたちで発展していったと見ています。

それを、アーネスト・W・バージェスらシカゴ学派が、「同心円的地域構造説」という都市発展のモデル(バージェス・モデル)として分析し、1925年に発表しています。中心にCBD(業務中心地区)があり、その周りにスラムのようなトランジションがあり、労働者住宅地域、戸建て住宅街、通勤者郊外と五つの地域に分化して発展していくというモデルです。

同時に、シカゴ周辺は鉄鋼業が栄えていたので、技術革命のひとつとして鉄骨造のフロアを積層するオフィスビルが開発されます。それが大資本のマネジメントを行う業態、つまり大勢の労働者を集約する建築類型として林立し、CBDを構成します。その周辺に労働者が住む便利な同心円都市形態が20世紀の産業社会にマッチしたために世界的に拡散していったのではないかと考えています。

バージェスは、「高度に自由な経済活動や完全な土地私有制度」が同心円モデルを発展させる必須条件であると述べています。つまり、空間を所有し、自由に売買取引することで現代都市の形式が生まれている。

西村 アメリカ型の現代都市は、すべての土地がマーケットの対象になるようにグリッドパターンで街区を仕切り、現場を見なくても空間を売買できる仕組みをつくってきました。時

代背景として、そこに高層ビルが出現し、中心部は業務地域となり高密度化していきます。

北山 1916年、高密度化を抑えるためにニューヨークでゾーニング法が生まれ、斜線制限がされます。でも、よく見ると、都市を良好にするためというより、窓際環境条件が悪くなると商品性能が落ちるので、外部空間を確保することでビルの商品性能を担保する意味があったのではないかと思います。

西村 なるほど。でも、基本的には街路の環境状況を守るためでした。また、基本的にCBDの密度規制は、人が集中し過ぎて交通がパンクするのを防ぐためのものですね。ただ、結果的に高さ規制や斜線制限が建物の形状を規定することになりました。

北山 戦後、日本の都市はまさにこの形式で復興します。自由に投資をし、空間を占拠できる法体系のもとで、資本主義経済システムにぴったりの経済活動のための都市をつくってきたのではないのでしょうか。

西村 アメリカ的側面は大きいと思います。住宅も商品化され、基本的に木造なので、30年くらいで建て替えることを前提としている。一方、日本には昔からの地形やインフラなどの都市構造や意味空間が残っています。土地には歴史的痕跡があるけれど、上物が変わっていくという二面性が生まれたと思います。

北山 そのせめぎ合いが日本の都市の特徴ですが、制度設計はやはり経済活動のための仕組みで、都市が経済の道具になっています。現代都市の問題は、生活や文化のための都市形成とは違うところに意思決定があることです。

西村 必ずしもすべてを経済原理で決定し動いているわけではありません。都市の二面性をどちらから見るかによって都市問題の解釈は随分と変わってきます。

### 縮退時代の都市論を求めて

北山 1960～70年代、都市の拡張期には、アルド・ロッシの『都市の建築』、コーリン・ロウの『コラージュ・シティ』、ロバート・ヴェンチューリの『ラスベガス』など、世界的に都市論が豊かだった時代がありました。

2008年から日本は人口減少時代を迎えたわけですが、縮退時代の新しい都市論は出てきているのでしょうか。

西村 日本の成長期には「メタボリズム」がありました。その時代は、人間が都市をすべてコントロールでき、明るい未来が来ると非常に楽天的なイマジネーションを抱いていました。環境問題もまだ深刻ではなく、都市に対する歴史観も希薄だったと思います。

当時、私自身は違和感を抱き、都市はそういうものではないのではないか、もっと地に足をつけて議論をすべきだと思ってきました。空間を操作すれば新しいものができるという考えは、右肩上がりの思想で、まさに今、縮退時代の都市論を考えなくてはならない。それは、これまでの都市をきちんと見直すことに手がかりがあるのではないかと感じています。

北山 都市論ではありませんが、水野和夫さんが「資本主義の終焉」<sup>1)</sup>を著しています。資本主義が終焉を迎え次の様態に変わったときに、違うかたちの都市が要求される可能性がある。どうい都市をイメージすればよいのか。それが、次世代の都市概念をつくっていくのではないかと考えています。

西村 20世紀の間に日本は人口4千万から1億を超えるまで約3倍に膨らみます。100年間で驚くべき増加です。それまではずっと3千万人台だったので、歴史的に見ると20世紀だけが特殊なのです。

人口集中を実現する交通や食料などの運搬、伝染病を防ぐ医療も発達しました。そこに資本主義のシステムが入り、過密都市になっていきます。つまり、さまざまな科学技術が、世界中の驚くべき人口拡大と、都市への集中を支えてきた。

本誌の根本的なテーマですが、それが種としての人間の本性にとってはたして大丈夫なものだったのか、と。世界的に先進国では都市の出生率が下がっている現状を見ると、そこを検証していく必要があります。

北山 20世紀が特別な右肩上がり、21世紀は特別な右肩下がりの時代になるということですね。広井良典さんは経済成長を目的としない次の時代を「定常型社会」<sup>2)</sup>と表現していますが、そういう時代になるのでしょうか。

西村 基本的にそうなると思います。ただ、右肩下がりになると、おそらく大変なことが起きるので、21世紀は平穏ではないと思います。その過程で、前近代に学ぶことがあって、それが共的な空間(コモンズ)ではないかと考えています。

北山 宇沢弘文さんの著書『社会的共通資本』<sup>3)</sup>によると、明治政府が法的に共用空間を排除していったそうです。経済発展を進めていくうえで、所有が曖昧な土地を残さず、すべてを明確にする制度設計をしたためにコモンズが日本で消えていったと。概念として残っていても実態として残ってない。ところが、今や日本の国内に放棄地というのが、九州全土くらの面積があるそうです。

西村 土地の所有を確定させるとするのは、経済行為の主体としての個人を確定させ、権利と責任を負わせるという社会です。それが、現代では細分化した相続などで所有がコントロールできなくなっているということですが、もう一度、所有と利用を切り離して考えていかなければならない時代になっているということです。

昔は民法で共同体が所有する総有が規定されていました。五十嵐敬喜さんが「現代総有」<sup>4)</sup>を提唱していますが、そうならば、空き地や、大量に発生する空き家などの問題を解決する手立てになるのではないかと。

北山 扱い方がわからない空間に対応するための制度設計が必要で、それが今後の都市の可能性をつくると思います。それは大都市だけではなく、地方都市のシャッター商店街や、所有放棄された山地をどうやって利用していくかにもかわります。

西村 それが現代的なコモンズなのかもしれません。

### 現代的コモンズと空間のマネジメント

西村 前近代と現代のコモンズの違いは、管理です。前近代の入会地などは、ひとつのコミュニティとコモンが合致していて、権利と責任も負って管理を行っていました。

でも現代都市のオープンスペースは、みんなのもののようにありながら、実はそのビルオーナーが管理している。でも、今後もっと都市がコンパクトになっていくと、その感覚が変わっていくと思います。利用者は、自分が空間のマネジメントに参加しないと自身のコミュニティや場所が廃れていってしまう危機感を覚え、積極性が生まれるのではないかと気がします。

北山 一般的に前近代のコモンはコミュニティのスケールが150人以下で形成していたと言われています。それは人間が個体識別可能な最大規模で、共有地の管理が緩くてもよかった。現代都市は、そのスケールが大きくなりコモンズが運営できなくなっている。次の時代のコモンズを管理するための新しいルールの発明が必要だと思います。

西村 歴史的に都市はあるルールの下で運営されてきました。例えば、祭りの時の空間の使い方など地域ごとの暗黙のルールや仕組みがあった。近代化でそういうものが消え



北山恒氏

てしまった大都市は、コントロールの必要があります。でも、日本のある規模以下のまちの人口はずっと安定していて、そこには、前近代から続いている社会のモデルがある。ですから、大都市と、中小規模の都市は両方の視点で、今後のガバナンスを考えていく必要があると思います。

北山 ハーバード大学や、スイス連邦工科大学(ETH)から、東京のリサーチをやりたいと協力を要請されることがあります。吉祥寺や中野などでは、働く場所と住む場所、飲み屋などの商業地域が混在して用途地域の制度が緩い古からの商店街に彼らは興味を持っています。そこに新しい未来の都市様態が東京にあるかもしれないと期待しているようなのです。一人ひとりの人間が自由に活動をしているよう見えるけれど、調和を生んでいると言うんです。そうした不思議な混在を許容するまちはヨーロッパにはあまりないそうです。ETHのケース・クリスタルはそれを「ハイパー・ミックス」と呼んでいます。

西村 共通の言語やある種の常識を共有した観念を持っているのが日本の特徴で、固有の現象です。口に出さなくてもなんとなく理解し合える関係がある。それが多民族国家と異なるところで、戦後や東日本大震災で、ひどい混乱が起こらなかった根幹に、その観念があるのではないかと思います。ハイパー・ミックスなまちは、アジアの諸都市にあります。貧富の差、都市と農村の差が大きく、問題を抱えている場合が多い。日本のようにバランスよく混在しつつ、まちが一つひとつ自立しているのは珍しい。純化を求めてきた西欧社会の都市計画の対極があるように見えるのかもしれない。そういう地区が東京には幾つかあり、下町とか山の手とかのトポグラフィとともにそれぞれ違う個性を持っています。そして、それぞれがコミュニティとしてのコモンズを共有している。それは、吉祥寺であれば、ごちゃごちゃした商店街の道かもしれません。僕は、そういうスケールで都市を考えていくよと思っています。

北山 そうですね。郊外型の店舗は品物の豊富さや安さで勝負しますが、まちの商店街には違う価値があり、そこに惹きつけられて住んでいる人のネットワークが潜在的にあり、そこに未来の可能性があると思います。

西村 それを顕在化する必要がある。例えば自分たちのコミュニティにとって、商店街が元気じゃないといけない、など。そうすると、ほかで安く買うのではなく、自分のまちにかか

わっていく。その傾向が地方都市にはまだありますから、今後はその方向に向かってほしいと思います。

北山 西欧から見ると、ハイパー・ミックスがデモクラティックな空間に見えるのかもしれませんが、僕はそうではないと思います。

西村 個々人が対等である様態だと思います。ただ、デモクラシーというのは何かを決定することなので、その決定の仕組みがあるかという、そうではなく、皆が勝手にやっていて、それが予定調和的になんとか成立しているという状態です。それでは、物流やインフラなどスケールの大きい事柄は決められないので、その背後にはきちんとした統治システムが必要になってきます。

北山 西村さんがイメージする民主主義的都市とはどのようなものでしょうか。例えば、香川県庁舎(1958)のプロティは戦後民主主義のために開かれた空間だとされていますが……。

西村 プロティは足下を市民に開放する建築の技術がそれを可能にし、その空間を自由に使ってよいという新しい空間の利用をイメージして実現させたものだと思います。でも、秩序あるコモンとは異なるつくりで、庁舎のプロティ形式が新しい時代の秩序を生み出したのかという、そこに建築家はコミットしてこなかった。それは、建築家の仕事ではないという認識だったのかもしれないね。都市のデザインは、その空間にいる人たちが、自分たちのものであると思えるアタッチメントをいかに作り上げていか、自立させていくということが重要です。それは、物理的な空間だけでできるものではなく、統治の仕組み、ビジネス、祭りなどさまざまな要因が生み出していくものだと思います。

### みんなの居場所のつくり方——公共的建築をめぐる

北山 現在、法政大学で江戸東京研究センターをつくる動きがあります。大学総長の田中優子さんは江戸学の研究者で、建築学科に陣内秀信さんがいますので、江戸の地形や人間関係、生活様式から現代に通じる都市様態を探ろうとしています。その研究をもとに、新たな東京のイメージをつくれなかと考えています。

西村 20世紀型の都市計画は、用途地域の線引きは、人口の集中をさばくためのもので空間をイメージするものではありませんでした。今後の都市にはイメージが必要です。具体的に人がどうふう生活しているのか、その空間がどれだけ認められ、愛され、その場にかかわりたいと思われているかが、その場の価値を決めていく時代に入っています。人をとどめ、それをマネジメントしていくためのデザインが非常に重要になる。

まちのかたちと生活のイメージをメッセージとして発するアーバンデザインができれば、それに共感する人が移住してくることになるので、そのための戦略がないといけない。

北山 齋藤純一さんは、bios(集団の生きる形式)とzoe(生きているという単なる事実)という概念を紹介しています。これまでは人間をひとつの個体とみなし人口密度を算出し、空間を定量的なzoeとして扱ってきた。でも、人間の生き方には個性がある。つまり空間にもbiosとzoeがあり、定量的なzoeから、都市空間もより個性のあるbiosになっていくイメージでしょうか。

西村 まさにそのとおりで、数字で空間を評価できるわけではありません。高密度でも生き生きとした小さな集落はたくさんあります。そうした前近代に参照すべきものがあり、それが近代を経て、違うかたちで再生するのが都市の未来ではないかと思います。

北山 1960年代に「近代の超克」と言っていたけれど、ただ乗り越えるのではなく、違うかたちで現代の方法を探り出す必要があるということですね。

ヴェネチア・ビエンナーレ建築展で、伊東豊雄さんがコミッショナーを務めた「みんなの家」が西欧社会で高い評価を得て金獅子賞をとりました。しかし、あの建築を生み出した日本社会という構図から見ると、あれは建築の敗北だったと思います。

津波で更地になるという大災害に見舞われ、タブラ・ラサのなかで新しいまちをつくらなければならないときに、建築家や都市計画家がどうビジョンを描けるかが問われ、挑戦すべき場でした。でも、そこでできたことが「みんなの家」という小さな建物でしかなかった。巨大な堤防や交通インフラはすぐに復旧し、URが各地に団地をつくったことは、近代の失敗を繰り返しただけではないのかと。

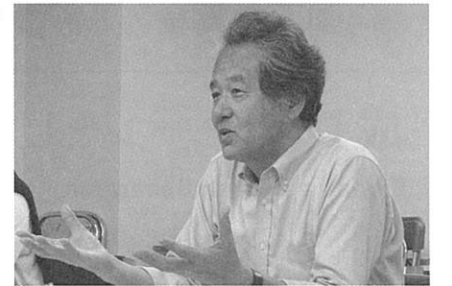
西村 欧米では、家族がひとつのコミュニティで、それを超えたコミュニティは生まれにくい土壌がある。人々が「みんなの家」というひとつの空間や場所にコミットできるということ、それに空間が寄与できたことが評価されたのではないのでしょうか。そして現れた空間が、コミュニティの空間感覚に寄り添う当たり前のものだったから、人々に受け入れられた。そこに結論するプロセスが、外国人の目にはユニークだったのではないかと思います。

北山 なるほど。ただ、タテワリの官僚制度がもたらした復興には疑問が残ります。それぞれの部署は最善のことはしたけれど、総体として大きな間違いを起こしかねない社会になっている。災害時だけでなく、日常の都市でも同じことが行われています。

例を挙げると、木造密集地帯の改善を働き掛けようとしているのですが、地方自治体によってはハウスメーカーによる建替えを推奨している。それをやっても同じ問題を再生産するだけです。家族の概念が変化している時代に、新しい住宅のビルディングタイプが要求されているはずなのに、それを実現する手段が乏しい。

私は建築家なので、これからの都市に適した制度設計、

西村幸夫氏



発見すべき都市の部品を空間として実現したいと思っています。そうすると、20世紀型の資本家やタテワリの制度をクライアントにした社会だと、実現が難しい。

西村 所有がはっきりしている住宅からやろうとすると難しいのかもしれない。『都市経営時代のアーバンデザイン』<sup>E</sup>という本を編集したのですが、そこで見えてきたのは、都市間競争で魅力的とされているものは、小さなオープンスペースが鍵になっていることが多いということでした。1960年代のマクロな視点の都市計画ではなく、ミクロな視点で出発し、そこを劇的に変えていくことで周辺のコミュニティのかかわり方が変わり、可能性が見えてくる事例がたくさんあります。まずはオープンスペースや、パブリックスペースからやると可能性が広がると思います。そこでさまざまなインタラクションを広げ、そのつながりが拡散してコミュニティが強くなるとすれば、それに寄与する空間のあり方が見える。もしかしたら「みんなの家」のように、デザイナーの創造性とは違う基準になるかもしれません。

北山 社会構造が変わると、建築の概念が変わってくるかもしれないということですね。20世紀の建築メディアは、建物の単体を写真で見せ、そこに掲載されることが建築家の職能であるとされてきたけれど、それが変わってきています。

これからの建築は単体で見得を切る、歌舞伎役者のようなものではなくっていくというのが、Y-GSAをスタートさせた建築家の共通の考え方です。当然ですが、大学の設計教育は未来をつくる先端的なものに変わらなくてはならない。先端的なものが前近代だというパラドクスはありますが(笑)、それを学生に教えていくことが、未来の社会につながるのだと思います。

西村 全体が縮小していくとき、空き家の群れの中にひとつ名建築があっても意味がなく、地域をどうプロデュースしていくかが大事です。オープンスペースと建物の関係を考えないと、敷地の中だけに閉じこもるのはあまりにも古いですよ。

2017年9月13日、建築会館にて  
聞き手=有岡三恵(文)、大村紋子、小泉秀樹

#### 参考文献

- <sup>A</sup> 水野和夫『資本主義の終焉と歴史の危機』(集英社、2014)
- <sup>B</sup> 広井良典『定常型社会——新しい「豊かさ」の構想』(岩波書店、2001)
- <sup>C</sup> 宇沢弘文『社会的共通資本』(岩波書店、2000)
- <sup>D</sup> 五十嵐敬喜『現代総論』(法政大学出版局、2016)
- <sup>E</sup> 西村幸夫編『都市経営時代のアーバンデザイン』(学芸出版社、2017)